

「いびつたときのかみだのみ

花守 一華

Side: B

緊張が解れてきたのか、少しだけ間を置いて彼女ははじける笑顔でこう言った。

「タバコさんですか。個性的な名前ですね」

私はまず、名前を間違えられたことではなく、日本語ないし言語運用の誤りに驚きを覚えた。

「私の名前はツカコだ。」

しかし、先天的で変えられないものに対して個性という言葉を使うのは少々間違っているように思うな。自己の意思決定下にあるものならばともかく、名前に対して個性を見出すのはどうかと思う」

Side: A

「すみません……」

「君はタバコを『吸わない』のだろうか、というのは冗談だ。謝るときは『み』ませんと言うのがいいと思うよ」

「あ、すい……すみません」

すごい人と出会った。

「自己紹介の途中だったな。よろしく、コマタさん」

Side: A

その先輩との出会いは、かなり衝撃的だった。

「よろしく。私は神だ。仕事で分からないことがあったら何でも聞いてくれ」

小さな飲食店のバイトで、神様と出会った。

「いや、名札を見てくれ」

あきれ顔の神様に促されるまま左胸——お、大きい。ズルい——のネームプレートを見ると、明朝体で「スタツフ 神田 束子」と印刷されていた。

なるほど、カミダ先輩。できるだけ苗字には触れないでおこう。高校のときに同級生がイジられて嫌がったことを思い出す。神（じん）くん、元気かな。

「タバコさんですか。個性的な名前ですね」

「は、はい。駒田 宗乃（こまた ときの）です。よろしくお願ひします」

まぶしい……。よろしく、と笑った神田先輩は反則級に美しかった。

Side: B

最近の学生は日本語遣いがなっていない！ などと言つてしまえば私も晴れて「ご老害」の仲間入りである。

——が、新人の彼女はどうも日本語が不得手らしい。

「フィンキ、という日本語は存在しない。それを言うなら

『雰囲気』だろう」

「はい、了解です！」

「……目上の人には『了解』ではなく『承知しました』など使うように。私は構わないのだが、怒る人もいるからな」

「はい！ りよ……しよ、わかりました！」

まあ、元気があるのに越したことはない。

Side: A

「ふむ、その意見は的を射ているな」

「ありがとうございます」

新メニューの反省会。梅雨も明けて来月からはシチセキメニューらしい。でも、その前に、

「先輩、足をすくうようですが……」

「足をすくう、だな。それで、どうしたんだ？」

「的をエるっていうんじゃないですか？ さっきの。先輩、的をイるって言ってましたけど」

「いや、的を『射る』であっているぞ。的を『得る』は誤用だな。なぜそんなに普及しているのか分かりかねるが」

「そうだったんですか……」

私の日本語ができないイメージを払拭し損ねてしまった。今度は勉強コーナーだ。

「シチセキって初めて聞いたんですけど、『七夕』ってタナバタじゃないんですか？」

先輩は渋い顔をして、近くのペーパーナプキンに、胸ポケット——たわわな胸元の——から取り出したボールペンで、ものすごく綺麗な字で「柵機津女」と書いた。

「これはタナバタツメと読む。察しはつくと思うが、織姫のことだな。七月七日に笹を立てたり星を見たりするイベ

ントのことではなく、な。学校でどのように教わったか知らないが、『七夕』はシチセキと読むのが正しいと思う」
小学校のときは「タナバタ」と振らないとバツになったのに、あれは間違いだったのだろうか。

Side: B

先日、駒田ちゃんとの雑談に「ささくれ」の話題を出した際、「七夕はもう過ぎましたよ」と返ってきたのだが、まさか「笹、くれ」と勘違いしてはいないだろうか。

そんな駒田ちゃんは、日本語よりも接客のほうが苦手らしい。本人曰く「愛想をふりまくのがムリ」とのことだ。訂正と励ましを贈ることにしよう。

「別に『愛嬌』をふりまく必要はない。駒田ちゃんはおかしいのだから、そこまで心配しなくても――

「ななな、先輩何を！ 先輩のほうが何百倍もかわいいし美しいですよ！ 私ごときに先輩レベルの接客は役不足ですよ！」

褒められて悪い気はしないが、くすぐりたい。しかし流れるような誤用に、かえって安堵を覚える。

「上には上があるものだよ。私なんて――
「そそそ、そんなことはないです！ 先輩こそ至上です！」
……今日の駒田ちゃんは、本当に困ったちゃんだ。

Side: A

「先輩、一緒に飲みに行きませんか？ 普段のお礼も兼ねて、今回は私が出しますよ！」

「いやいや、それは悪いよ。せめて折半なら付き合おう。っと、そうだ。私は辛党だな。おススメの居酒屋があるんだ。そこにしないか？」

記憶は乾杯で途絶えている。

先輩はすぐくお酒が強かった。記憶の断片を寄せ集めてみると、先輩の休日の話を思い出した。全国各地の地酒を取り寄せては飲み比べているとか、最近甘いチョコと黒ビールの組み合わせに夢中だとか。そりゃあ、強いわけだ。現に私が二日酔いでフラフラしているのに、私よりも飲んだ先輩はケロッとしている。

……今日が朝シフトじゃなくてよかった。

「どうした？ 今日はず調子が悪いようだが。大事をとって早めに上がるといい。」

——多分、先輩は「二日酔い」の概念を持っていない。

Side:B

駒田ちゃんが二週間の休暇をとった。「今留学しないと、あとで後悔するらしいんです！」と言って、韓国に行った。

「あとで」「後悔」とはまた典型的な「ニジユウのフタエ」だ。駒田ちゃんらしいっちゃあ、らしい。

それにしても、留学か。かなりの行動力、さすがK大国際学部だ。私はこの「国際」という言葉が苦手である。フロンティア的なものを強く意識する排他性は、どうも私の肌には合わない考え方のようだ。グローバルに逆行しているようにも感じる。

かわいい後輩がそこまで考えているかは、分からない。あまり深く考えているようにとは思えないが、それこそ神のみぞ知る、だ。

Side:A

先輩にお土産を買った。喜んでもらえるといいな。

「先輩、こないだ「辛党だ」って言っていましたよね」

「そうだな」

「これ、お土産です！ どうぞ！」

韓国製の乾燥キムチ（激辛）を手渡すと、先輩は一瞬間を引きつけて「ありがとう」と呟いた。

「しかし私は辛い食べ物が苦手なんだ……」

先輩曰く、辛党というのは「辛い物好き」という意味ではないらしい。

日本語はムズカシイ。